

---

# 春風美空

『零』

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

春風美空

### 【Zコード】

N4941D

### 【作者名】

『零』

### 【あらすじ】

翔一は平凡な毎日に飽き飽きしていた。偶然思い出の場所に居た彼女と出会い、翔一は大きく成長していく

## 一章 『始まりの予感』

次の日・・何となくだが、昨日会った彼女の事が気になつた。と、言つより気になりすぎて、あまり眠れなかつた。

あの見透かすよつな目・・・・・

・・今日逢えたら、何故そんな目で俺を見たのか聞いてみよう。

流石に連続で授業はサボれる訳がなく、今日は大人しく授業を受けた。帰りのH.Rが終わつた瞬間、俺は『はぐれメタル』の如く学校を逃げ出した。

制服のまま俺は急いで、あの桜の木のある場所へ向かう。

あまり寝てないせいか・・やや足取りが重い。

それでも俺は何とか辿り着く事が出来た。

桜の木の場所に・・・彼女の姿は無かつた。

翔一

『……そりやそうか……何を俺は……期待していたんだかな……』

此処までほぼ走りっぱなしで流石に疲れたせいか、瞼が重い……俺は木に寄りかかり……そこで意識は、ブラックアウトした……

『……て』

『……き……て』

誰……だ?俺を起しそうとしているのは……

『起きて・・』

翔一

『ん・・誰・・だ?』

俺は瞼をゆっくり上げる。ソコには・・・

昨日会った彼女が目の前に居た。しかもウチの学校の制服を着て・・・

? ? ? もしかして・・・

翔一

『同じ学校の生徒?』

女性

『うん・・そう・・』

意外だった。何となく雰囲気が大人びてて、彼女は俺より年上だと思っていた。

だが・・ホントは俺と同じ学校の生徒だった。  
俺は頭を搔きながら、立ち上がる。

翔一

『・・自己紹介がまだだったよ、俺は秋山 翔一、宜しく。』

美空

『私は・・白凪美空。宜しく、翔一君。』

互いに自己紹介をし、握手をする。

翔一

『美空は』の場所に良く来るの?』

美空

『ええ、桜の木が咲いている時は大体は此処にいるわ。』

『うだつたのか・・でも何となく分かるかもな。此処は数年振りに  
來たけど、心が安らぐ。彼女もそれに惹かれて此処に来るんだと思  
う。』

俺達は桜の木を見上げる。

風が花びらを散らせ、桜吹雪が起じる。

翔一

『しかし同じ学校の生徒だつたとはね、意外だつたな。』

美空

『・・・そうね』

また桜の木を見上げる。

・ そう言えば俺は美空に聞きたい事があつたんだ。

翔一

『 そう言えば昨日見透かした目で俺を見たのは何故なんだ?』

美空は俯く。だがまた顔を上げ、俺の目を見る。

美空

『 ・・アナタは・・辛いの?』

翔一

『 え?』

突然なんだ、急に。

俺が・・辛そう?

・ ・・正直図星だ。毎日が変化しない『色』、心が灰色な日々。

生きるのが・・退屈で嫌だ。

翔一

『 ・・どうして俺が辛そうだって分かつたんだ?』

美空

『田を見れば大体は分かるの。それに……表情を見れば、ね』

何時もそんな顔を俺はしてたのか……

美空

『余計なお世話だけれど、待っているだけじゃ何も変われないって思つ……何かを変えたいって思うのならまず自分が動かなくちゃ。』

翔一

『……そうだな』

美空の言つ事は分かる。でも俺には……

翔一

『田標も夢もないんだぞ？そんな俺でも……変わる事が出来るのか？』

美空は表情をほこりばせ、俺を見る。

美空

『……大丈夫、アナタは変わることが出来るわ。もっと自分を信じて。』

『

翔一

『……ああ、分かった。』

何の根拠があつて美空はそう言ったかは知らない。  
でも俺はこの時背中を押されたような感覚だった。

桜の木を眺めながら俺はそう思った

## 第一章　『END』

# 一章 『始まりの予感』（後書き）

でも、そんな駄文でも最後まで読んでくれた皆さん。

大大大感謝です。

## 一章 「動き始めた歯車」

次の日・・何となくだが、昨日会った彼女の事が気になつた。と、言つより気になりすぎて、あまり眠れなかつた。

あの見透かすよつな目・・・・・

・・今日逢えたら、何故そんな目で俺を見たのか聞いてみよう。

流石に連続で授業はサボれる訳がなく、今日は大人しく授業を受けた。帰りのH.Rが終わつた瞬間、俺は『はぐれメタル』の如く学校を逃げ出した。

制服のまま俺は急いで、あの桜の木のある場所へ向かう。

あまり寝てないせいか・・やや足取りが重い。

それでも俺は何とか辿り着く事が出来た。

桜の木の場所に・・・彼女の姿は無かつた。

翔一

『……そりやそうか……何を俺は……期待していたんだかな……』

此処までほぼ走りっぱなしで流石に疲れたせいか、瞼が重い……俺は木に寄りかかり……そこで意識は、ブラックアウトした……

『……て』

『……き……て』

誰……だ?俺を起しそうとしているのは……

『起きて・・』

翔一

『ん・・誰・・だ?』

俺は瞼をゆっくり上げる。ソコには・・・

昨日会った彼女が目の前に居た。しかもウチの学校の制服を着て・・・

??もしかして・・・

翔一

『同じ学校の生徒?』

女性

『うん・・そう・・』

意外だった。何となく雰囲気が大人びてて、彼女は俺より年上だと  
思っていた。

だが・・ホントは俺と同じ学校の生徒だった。  
俺は頭を搔きながら、立ち上がる。

翔一

『・・自己紹介がまだだったよ、俺は秋山 翔一、宜しく。』

美空

『私は・・白凪美空。宜しく、翔一君。』

互いに自己紹介をし、握手をする。

翔一

『美空はこの場所に良く来るの?』

美空

『ええ、桜の木が咲いている時は大体は此処にいるわ。』

『うだつたのか・・でも何となく分かるかもな。此処は数年振りに  
來たけど、心が安らぐ。彼女もそれに惹かれて此処に来るんだと思  
う。』

俺達は桜の木を見上げる。

風が花びらを散らせ、桜吹雪が起じる。

翔一

『しかし同じ学校の生徒だつたとはね、意外だつたな。』

美空

『・・・そうね』

また桜の木を見上げる。

・ そう言えば俺は美空に聞きたい事があつたんだ。

翔一

『 そう言えば昨日見透かした目で俺を見たのは何故なんだ?』

美空は俯く。だがまた顔を上げ、俺の目を見る。

美空

『 ・・アナタは・・辛いの?』

翔一

『 え?』

突然なんだ、急に。

俺が・・辛そう?

・・正直図星だ。毎日が変化しない『色』、心が灰色な日々。

生きるのが・・退屈で嫌だ。

翔一

『 ・・どうして俺が辛そうだって分かつたんだ?』

美空

『田を見れば大体は分かるの。それに……表情を見れば、ね』

何時もそんな顔を俺はしてたのか……

美空

『余計なお世話だけれど、待っているだけじゃ何も変われないって思つ……何かを変えたいって思うのならまず自分が動かなくちゃ。』

翔一

『……そうだな』

美空の言つ事は分かる。でも俺には……

翔一

『田標も夢もないんだぞ？そんな俺でも……変わる事が出来るのか？』

『』

美空は表情をほこりばせ、俺を見る。

美空

『……大丈夫、アナタは変わることが出来るわ。もっと自分を信じて。』

『』

翔一

『……ああ、分かった。』

何の根拠があつて美空はそう言ったかは知らない。  
でも俺はこの時背中を押されたような感覚だった。

桜の木を眺めながら俺はそう思った

## 第一章　『END』

## 一章　『動き始めた歯車』（後書き）

駄文ですが、読んでくれた人達・・・大感謝です（^-^）／

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4941d/>

---

春風美空

2010年10月9日02時25分発行